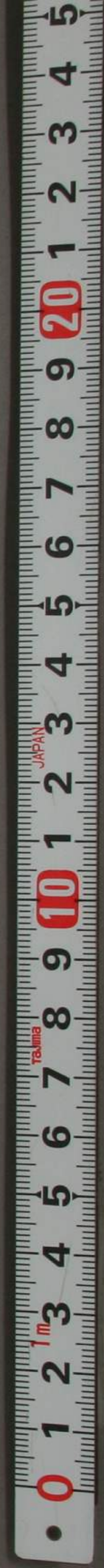




~13
3157
11



曲亭翁手輯

開卷驚奇

俠客傳第三集

歌川國貞畫

羣玉堂精刊



甲午孟陽
有像魁本

俠客傳第三集引



今茲憂月本集亦脫稿是日得拓
本一張於涇筆書賈群玉堂閱是
楠廷尉正元朝臣所禱房山神宮
尺書也左方有歌忠誠不朽筆跡
如一日其幽緘且有華押不畧宜

職姓名。即以丸山可澄氏。舉抑鼓
比技之。真蹟無疑者也。意楠廷尉
文志兼備。而其諷詠。太平記及吉
聖拾遺所載。各纔一歌。與今所見
共為三歌。其它佳什。猶有惜泯滅
不傳。是書可謂崑山片玉矣。本集

多言楠氏車。因翻刻所得。拓本。以
荆人皆卷。四方君子尚鑒焉。虛中
有實。知非游戯。則拙編亦增光。
天保四年。暑月。之吉。燒樟拂蠶。題
于庭。學燈下。蕙笠。漁隱。

董齊盛義書



このほしくきくつせう
ふみんがこよ

皆々仰

沙山筆

仁高次九煙治
免茂仁太郎
横堀系右衛門
た西

むねのいひ

とあつしあひ

ふぢぬもし

かみくのほめ

かみあひ

海

北山の金閣

仙觀の尼

仙觀の下



開卷驚奇俠客傳第三集總目錄

壹卷

第十回

姑摩姫苦學讀劍書
無上玄通化現仙觀
論順逆九六媛授復箭
踏香煙姑摩姫邁北山

第十回

金閣女俠殪雙
葛城僊孃界警

第十回

禱芳墓楠女擊殘仇
結碁局沙彌訟災祥

第十回

滿家計遣羅轎
維盈囚免投石

參

第十回

正直受命送姑摩姫
彼岸一謬鬧八九莊

第十回

縫殿自燒飛樓
安次送死會生

第十回

山上千里鏡克關莊院
佛前本命録初知病妹

第十回

隆光千速驅他賊
長總逆旅遭騙喝

第十回

疑似孽小夜二殞命
瘞金計木綿張越牢

總目錄終

本集亦復起應永十一年秋八月盡十九年秋八月
其第二十一回已上總目錄見第一集第二集首卷

花宮の寢殿

茂堤



小夜の中山

沖津の旅宿



莊院の下

八九の莊院

日の國の山堂



大分縣傳第三集終

四

三三三三三



木綿張きわた
荷二郎にがは

物さゆふよかき糸綿も
ちたせく那みやえ乃
楠くすのぎ秋のそと孫波女
登楠正直のぼり 信之翁

楠式部少輔
正直のぼり

像替第四



忠義義膽ちゅうぎぎだん 女中丈夫にゅうちゆうしやうぶ 美而不艶み而不艶
劍術豈麤けんじゆたか 仙娘妙扶せんにやうめうたすけ 野火心誅のひこころころ
奇才雖後きさいすいご 祖德何孤そとくなにこ 勸懲啓蒙くんていけいもう
口碑罔朽くひびあこ 補天以石おぎなひといし 缺陷創敷けつせんそうしき
登楠姑摩姫のぼり 玄同散仙げんどうさんせん

楠姑摩姫
玄同げんどうのき

赤松五郎助
のりたけ

像替第三



管領白山うんりょう
満家まんけ

孤忠薄命雖志不伸
天賜有後摧櫃得珉

贅隅屋維及
頼鳥齋野叟
雕 岡

隅屋小郎ぐまのこらう
維盈いへい

像替第五



むね乃史むねのし
いのみおいのみお
なまなま
せよせよ

八九奴隷はちゆうぬれい
彼岸ひがん

節婦縫殿せつふぬい

像替第十六



俠客傳第三集列傳追加姓名目錄

將相足利義滿あか足利義持あか以下係于室町家臣斯波義將あか斯波義教あか細川滿元あか
畠山滿家あか楠正直あか熊谷滿實あか宮滿重あか赤松則助あか曾根山高春あか
遊佐就盛あか

武士品倉復市安次あか篠持媒鳥あか橋高獵九郎有幸あか

塚見木兎六あか市人澳津逆旅主人あか數坂皴三あか

奴隸彼岸あか手作あか莊客四光村長あか名字供あか允九老二村莊客數名あか名字供あか

婦人水石あか苦子あか垣衣あか鈍梅あか

浮屠沙弥宗純あか女僧智圓あか小女仙あか多豆あか知止湍あか

強人五十槌電次隆光あか五十槌雷九郎隆成あか曾曾利鼠坊八あか

雲館奇峯五あか白鯨振平あか出水挺頭三あか木綿張荷二郎あか

野狐紺あか小田貫無地内あか這二名荷二郎伏家小賊也あか本文不載名
通計二十八名あか莊客名不敷寫與第一集第二集所録列傳七十二名共二百一十名追加姓名目錄終

開卷驚奇俠客傳第三集卷之一

東都 曲亭主人編次

第二十回 姑摩姫苦学劍書を讀む
無上玄通仙觀を化現す

再説楠姑摩姫あかの仙書あかと九六媛あかの受あかけあかりあか。密々あか小幡あかにて熟讀あか小日を累あかひあかりあか。
学あかの空あか小螢あか雪あかの思あかひあか。耽あかりあかたりあかけあかるあか。初あかの程あかの情あかとあか。霧あかの籬あか小あかちあかどあか。文字あかの
讀あかとあか。理あか義あか解あかがあか。靴あかをあか隔あかてあか。癖あかをあか搔あかくあか。心地あかのあか。まあか。甲あか斐あかるあかりあか。勉あか学あかびあかくあか。怠
らあか。只あか。寝あか。食あか。とあか。まあか。思あか。つあか。ぬあか。間あか。のあか。うあか。まあか。二あか。卷あか。もあか。解あか。一あか。ゆあか。まあか。くあか。いあか。りあか。了あか。隨あか。小あか。名
香あか。とあか。焼あか。てあか。女あか。仙あか。小あか。見あか。参あか。老あか。教あか。とあか。受あか。んあか。のあか。面あか。をあか。とあか。心あか。をあか。励あか。しあか。てあか。るあか。由あか。研あか。究あか。志あか。りあか。とあか。知あか。りあか。
よあか。もあか。るあか。伯あか。母あか。御あか。前あか。智あか。正あか。尼あか。隅あか。屋あか。維あか。篋あか。のあか。妻あか。縫あか。殿あか。のあか。病あか。病あか。のあか。所あか。為あか。欲あか。とあか。同あか。慰あか。めあか。りあか。
いあか。ぬあか。比あか。しあか。何あか。とあか。もあか。ちあか。んあか。面あか。色あか。のあか。常あか。るあか。とあか。物あか。思あか。つあか。けあか。んあか。えあか。まあか。せあか。るあか。六あか。夜あか。とあか。くあか。日あか。とあか。もあか。ちあか。んあか。物

用を書案の並措に微笑してその談の元か疑がれ學術進まぬ疑ふ故邪路
 不も入ん。什麼疑ふ可とせん疑ふ可とせん心よ向つて分明ある。我這仙觀の
 深山に似ける壯觀する。和女郎の這え疑ふ知ま大厦高樓も又柴門の白屋の
 只住む人の心あり然る富貴を羨まきで足ること知り分る宮殿の高本屋の異なる
 又又足ること知され千席の室坐されも。萬席を羨り此是悟りの入あふ。凡
 夫の迷ひを醒まは捷徑あり。神社佛閣華美を盡して凡夫の信を増す欲ま
 我這仙觀樓閣の辟言は辰虫氣海市の如し。実不えのあえ。ありと或へ則有り。ありと
 思へ則無し。これを命けて幻境と云ふ。只這山のまふ。浮世の総て幻境を悟らぬ
 故の夢の中遊びて。五十年夢をわたりと誰う知る。上古の俗質朴也。民も
 ち。貴人も。茅茨不剪。采椽不斲。宮室之卑。うまて。力も清濁の盡した。那唐山
 中。聖と云ふ。世九馬の質素。儉ふ。及。我神風の伊勢山田る。天照自天神の

大宮所を符とす。浮世の人の神慮は。月夜に華美を好む。外物を飾り。騷れる故不
 長久も。子孫廢絶致も。曉らん。抑亦悲し。か。宮中貴四海を有る。天白手と宣示
 ま。御祖の神の神慮。不差して。驕奢の為。小民を勞ら。宮殿華美を盡す。又。甘露
 旋も。快。建武の壞。乱。即是。况世の。跡を埋め。神仙と成り。佛菩薩と稱へられ
 久方の乾坤と。俱。長久も。の。皇泰。阿房の餘材を討り。身。九層の樓。臺。坐。て
 樂。と。何。を。て。凡。夫。異。の。と。せん。然。仙家。の。暮。不。の。紫。微。宮。殿。居。き。欲
 去。又。成。佛。と。願。ふ。の。の。天。堂。の。快。樂。と。欲。ま。その。惑。ひ。甚。し。知。ま。濁。世。を。厭。む。の。の。流。石
 拂。身。と。雲。水。不。儘。ま。の。絶。て。未。る。所。を。れ。東。西。と。て。足。ら。る。と。世。知。ら。る。と。世
 け。人。不。求。め。る。と。も。あ。る。と。心。言。け。れ。危。く。身。の。低。け。れ。地。と。俱。并
 降。ま。これ。を。名。つ。て。山。中。の。宰相。と。い。け。り。和。女。郎。ま。の。義。を。諭。さん。と。茲。仙。觀。の。化。現。せ。り
 先。よ。く。あ。れ。を。い。ひ。か。と。い。れ。て。姑。麻。姫。詔。然。る。頭。と。拾。げ。ち。祥。と。有。か。ま。ま。と。金。言

不^ねを^か睡^らされ^るも^つ勞^れと^し知^らず^る。奇^きの^め妙^め意^い表^はれ^るて^は我^がを^怪む^可れ^るも^光と^自智^と
 秘^くして^色中^の見^える^ると^さけ^れば^伯母^の尼^師前^に隅^の屋^に夫^の婦^の住^まる^ると^知ら^ぬも^姑麻^の
 姫^の性^の大^に人^を備^へて^容止^し漸^く小^に美^麗を^表は^する^る月^の小^に擬^へる^る花^の比^をし^て信^じ妙^の情^を祝^し影^を異^に
 衣^の優^に婆^に娼^に娛^にふ^て浮^世の^花を^散ら^する^る。育^つ西^の年^を歴^つて^入る^る佳^の塔^に君^を討^つは^らめ^て
 絶^える^る楠^の氏^と興^えん^どと^維盈^の殿^にの^りて^同話^を休^め煩^を介^を程^を姑^の麻^の姫^の学^を術^を既^に
 奥^の義^と極^めり^て終^つて^ある^るあ^らは^れ師^の仙^の嬢^のふ^りと^報へ^るる^る終^つて^真と^と思^はれ^る
 け^れば^その^夜女^の情^を々^々地^に臥^し房^をと^起出^て口^に呪^の文^を唱^れる^る戸^の節^の空^を敷^るる^る勿^れ然^とと^外
 面^を出^しけ^り。信^じて^進退^をま^かけ^りと^思ひ^つ又^唱る^る呪^の文^を俱^に身^の只^に飛^鳥の^と突^つ
 然^に足^の地^に踏^まる^る瞬^に息^を回^し高^の城^に出^るる^る仙^の觀^の小^に多^にま^けれ^ば九^の六^の媛^を召^し近^に着^る
 その^術を^賞め^て側^に坐^らし^て別^の後^の安^否と^問ふ^る登^時兩^個の^仙童^女の^姑麻^の姫^を茶^を
 看^め浮^世の^事を^同慰^めて^管待^初弥^倍け^り少^選と^姑麻^の姫^の師^の女^仙の^うち^對

以^て。皇^の義^を論^をさ^るる^る口^に訣^を傳^へひ^まり^て智^と法^を疑^はれ^るる^る既^に小^に学^ぶて^小稍^年
 来^り多^し隨^つて^小学^術成^就の^時至^りけ^ん心^神毎^に清^朗と^身の^輕た^と毛^の如^く走^ると^飛
 鳥^を提^れり^ての^訣を^真と^思は^れり^て初^に術^を試^しみ^果を^奔走^し神^速地^を踏^みて^と
 來^りて^宿念^を障^りる^る。雙^を討^つて^日易^くあ^らべ^りと^問へ^ば九^の六^の媛^を點^頭て^然と^仙術^を
 成^熟と^思は^れり^て復^に雙^を討^つる^る心^を安^らる^るる^る時^を至^りて^今より^等と^三松^を頂^に宿^望を^す
 遂^に女^を素^の仙^の傳^の劍^の俠^の御^の向^をあ^らは^する^る示^せり^如く^ある^る已^にと^思は^れる^る所^の今^{より}の^事を^思ひ^て
 の^りる^る術^を成^就と^思は^れる^る文武^の道^を疎^くも^あら^ぬる^る所^の今^{より}の^事を^思ひ^て
 里^の小^に文^を学^び武^を講^ぶる^る後^に用^ひる^ると^あら^ぬ亦^に這^美を^嫌ひ^るる^ると^思は^れり^て姑^の麻^の姫^を
 怡^に悦^ぶ勝^を即^ち便^に這^夜を^初と^て夜^毎々^々あ^らは^する^る儒^の書^の十^二經^を上^に目^をあ^らせ^り
 傳^へる^る法^を學^びと^学び^て老^の莊^の関^の尹^の諸^子百^家の^書兵^法の^七書^武備^志の^類皆^を悉^く講^ぶり^て
 聽^て儒^の学^も既^に疎^くる^る武^の藝^を唐^の山^の十^八般^を本^邦の^鞍馬^八流^を習^ぶと^あら^ぬ所^を

多敷の劍の敵は、西個の仙童女とせされ。原這西個の仙童女の豆と喚れ知止端
 と呼れて年十二の女も、俱九六媛の仕ると、幾百年の事と見え、仙術を傳授して
 鍾離權が青龍の劍法をもゆり、初に姑麻姫、他及、學を、稍久しう
 きて、他們の及、を、り、登時九六媛、教て、擊、劍、是士卒、九、技、大將、弓、馬、を
 能く、陣法を、宗、と、下、遮、莫、這、擊、劍、只、是、士卒、の、技、と、大將、の、學、と、近
 つ、敵、拂、と、か、ら、る、心、り、も、只、大、刀、と、り、入、を、研、し、と、欲、ま、れ、人、も、亦、大、刀、と、り、必、我、と、研、ん
 と、欲、ま、し、這、時、勝、負、不、定、何、を、と、り、敵、を、勝、ん、勝、と、必、技、あ、ら、ん、心、と、七、仇、と、防、心、と、と
 敵、と、征、せ、必、勝、と、の、と、る、然、仙、家、子、青、龍、劍、の、真、法、あ、り、又、禪、家、の、活、人、殺、人、の
 劍、法、あ、り、仙、佛、の、方、異、な、れ、も、敵、の、死、を、忘、れ、一、心、逆、決、定、と、自、若、と、と、れ、小、當
 ら、柔、よく、剛、と、征、ま、さ、る、理、の、即、一、致、と、這、義、を、よく、胸、に、藏、め、機、の、臨、ま、て、乱、れ、を、敷、
 劍、の、既、小、足、れ、る、又、弓、馬、と、學、べ、と、ら、ん、軀、と、二、枚、の、紙、を、折、り、馬、の、造、り、て、口、に、置、を

唱れ、忽地、一箇の白馬、お作り、鞍、も、具、足、ら、る、庭、の、立、り、け、登、時、又、九、六
 媛、の、姑、麻、姫、の、教、る、馬、の、進、退、の、細、あ、り、敵、の、細、と、破、る、と、死、の、鼓、音、者、の、杖、の
 離、る、小、異、る、是、故、の、細、中、細、鐵、鏢、と、縫、藏、と、義、貞、記、の、識、さ、れ、る、大、將、の、用
 心、の、只、這、一、條、の、と、る、千、軍、萬、馬、の、中、の、大、將、騎、馬、の、修、煉、と、兼、走、る、と、
 旋、風、の、如、く、此、も、礙、滯、あ、り、と、け、れ、敵、の、こ、れ、を、敷、ま、す、馬、の、脚、を、研、と、克、る、矢、前、を
 射、中、と、も、中、ら、ぬ、の、と、も、又、新、田、贈、中、納、言、の、軍、記、に、識、着、ら、れ、る、侍、れ、騎、馬、を、軍
 旅、の、緊、要、の、も、あ、る、と、必、善、學、ぶ、と、論、と、是、夜、の、馬、術、を、教、え、又、次、の、夜、の
 的、を、掛、て、射、法、を、教、ら、る、侍、ら、る、姑、麻、姫、の、開、甲、夜、々、の、宿、所、を、出、て、獨、仙、家、の、赴、け
 どの、竊、小、分、身、の、法、を、設、て、臥、房、の、熟、睡、せ、し、む、形、貌、を、遺、た、ら、れ、毎、の、側、に、漆、臥、を
 する、姑、母、の、縫、殿、を、夢、み、た、然、る、と、あ、り、知、ら、ぬ、侍、の、侍、而、光、陰、在、再、を、又、三、三、年、
 歴、し、れ、姑、麻、姫、の、仙、書、を、得、て、久、く、を、學、ぶ、五、輪、を、身、の、年、も、這、春、の、十、二、歳、の、也



十六

皇平玉室卯發



第二十一回 順逆と論じて九六媛返矢と授く
香煙と踏く姑摩姫北山小適く

待ば一日も千秋の似たる姑摩姫の復讐言の大望頼り心算を焦燥とて三
月の季秋四五月あるく還るのべとぞえい女仙を我日もあそ又仙觀へ見て回ん
さかかて庭の合つ花をさても毎より遅れ心地せし梅の過は梅未し開け散れ散ら
後春も暮果長日くく難て五十餘日と過り今も比るべいと云へその
夜葛城山に仙觀を赴けし師もかかるといふと豆と知止端と二名のものを
是より後日を隔ててよくと屋をのりけれども那女仙の来る春過く夏も稍降そ
ゆき雨煩く乾ぬ檐の昔昔蒲昔昔端午の節供ふるまひの姑摩姫の今宵又
師の仙觀を赴けし帰觀の有き問をともあも似せ黄昏時候より尼公の方丈へ
招れ法談と听せし短夜を更更蘭て葛城山へ竟る治もも次の日未牌時候

より又分身の法を設てその身の代を宿所へ送し時を程まき葛城山へ仙觀を未
けれ豆と知止端と出迎へ姫上を遅れかける我師の還るのひくおん身を
等てと一も卒とていそ共姑摩姫歎け且憂く掖れて奥中を赴ける然けれ
とも九六媛の曲録は腕の倚拭は紋紗の團扇の顔不醫七假寐しく死灰不似る姑摩
姫と這光景の折々なりと云ふのこ呼覚え入るまがわく等と約莫半响あま九
六媛やうと頭と拾て声朗誦をを听けが
俠傑惟推古劍仙 忠云鬼雪恨只香煙 誰知勇士生奇女
隻手能翻宿世冤 恁吟く身と起せ姑摩姫と我向ひく仙嬢か
らせぬい秋星裏示させぬ復讐の時を等しより一日も千夜を麻呂の地あ
剛才五松のうたりなり早くと請票さ入と思ひかとも正月より這仙觀はまは
後春過く夏も亦五月の天の有りゆり今茲る本意と遂くたやと回へ九六媛點

頭て然之初小六松とひい天機を洩さぬ與ふと。その実も今茲の然るはとて
 惴々たるを稍復雖も時に来ぬれと左中右中の人力中較易くぬ大敵を善
 順逆の理と平那罪戾を天の告る。介後子を下さし。い。て。の。以。て。傍小措れ
 白金の香爐の香を焼熏らして貌を改め眼を閉て默然と半响許稍合意
 して解てや。登姑麻姫這方へ枝ね御宗南北西朝の蝸角の戦ひ五十餘年原是
 宿因あるとあると和女郎へ具子知りくる状と向へ姑麻姫膝を找めてそを仰て
 どもも奴家ゆとヨスうを思ひ口止らねば縁故と考極め居るねどもそを尊氏と直義
 們が恃逆奸詐の做せ所世の人通て知らぬあつと。といふ九六媛嗟嘆してそを勿論に
 るるが。那内乱中起本あり言長くとも听ねが。昔年北條貞時が奸計で最も惶
 北皇統と三流の做しなり天子の大威徳を分ちまわせんと思つた。大覚寺殿
 と持明院殿と御子孫各々迭代の皇位を即めべと奏し定めまわらせぬ抑大覚

寺殿とまう。なるの龜山天皇の御子孫然る龜山天皇脱履の後の嵯峨るける
 大覚寺と仙居の做しあり。是よりしてその皇統を大覚寺殿と稱まう。後
 持明院殿とまう。後深草天皇の皇統中。中古後堀川天皇の外祖も持
 明院基家卿の宅として仙居の做しあり。幾代の天皇這處を仙院と稱しあり。後
 去から。後深草の皇統を持明院殿とまう。梅松論子據ると云。後
 嵯峨天皇の御讓位の敕詔。一の御子。久仁親王。御即位あり。後
 脱履の後。後白河法皇の御送領る。長講堂領百八十箇所の莊園と御領
 として。御子孫永く御即位の御王と止ある。却次々。後深草の御母弟恒
 仁親王。御即位あり。御即位あり。御治世の後々。御断絶あり。仔細あり。後
 る。と定まらぬ。これより。龜山天皇の東宮。後宇治院御即位あり。後
 至る。那北條が拒まう。後宇治院。後深草兩天皇の御子孫。

その子 位小即ちまろりく伏見 後醍醐天皇 第二の子 後伏見 第一の子 後二條 第一の子 花園 第三の子
後醍醐天皇 第二の子 北條高時が計ひ京とて後伏見帝第二の御子皇仁親王 光厳帝 後醍醐天皇
東宮不立なり是故小持明院殿 後醍醐天皇 東宮不立なり是故小持明院殿 後醍醐天皇
東宮不立なり是故小持明院殿 後醍醐天皇 東宮不立なり是故小持明院殿 後醍醐天皇
東宮不立なり是故小持明院殿 後醍醐天皇 東宮不立なり是故小持明院殿 後醍醐天皇
東宮不立なり是故小持明院殿 後醍醐天皇 東宮不立なり是故小持明院殿 後醍醐天皇
東宮不立なり是故小持明院殿 後醍醐天皇 東宮不立なり是故小持明院殿 後醍醐天皇
東宮不立なり是故小持明院殿 後醍醐天皇 東宮不立なり是故小持明院殿 後醍醐天皇
東宮不立なり是故小持明院殿 後醍醐天皇 東宮不立なり是故小持明院殿 後醍醐天皇
東宮不立なり是故小持明院殿 後醍醐天皇 東宮不立なり是故小持明院殿 後醍醐天皇
東宮不立なり是故小持明院殿 後醍醐天皇 東宮不立なり是故小持明院殿 後醍醐天皇

故の後醍醐天皇 皇者小潛幸ませりか終武家小合はれて隠岐の
離宮不遷されぬ却高時が制度として東宮 位小即ちられて正慶と改元
是より江湖大く乱れ北條高時を一族を新田義貞の誅滅せられ西六
波羅 仲時 赤松圓心 足利尊氏 們が為小首と喪ひ千劍破の城小向ひる十
萬餘騎の東軍は皆正成小刺滅せられ天皇 船の上へ御替 還幸あり
高時が立すむせむ光厳帝と退けて正慶の號と削られ元弘か下あり聖運茲小
掲焉貴と賤とわめて皆聖徳と仰ぐもの素懐と遂さるひより帝は故に傲
らせぬて大内裏の造営士民の恨とを分るる新田義貞の奏見も制度の
かゝるに賞罰當らば士庶相怨とて亦復建武の逆乱あり異朝唐の玄宗と
那身臨淄王なり時皇后の儀の乱と討夷はて父相王 帝 位小即ちられて
禪と受て治世四十餘年不及りその中元初の精を厲し政小親と國治り民

安くして中興の君を以て天皇の年を至りてをなす心傲りと奸臣を登用し艶妃
楊太真を惑溺れて安祿山の虐乱を是より唐祚衰へて太平の日の稀なり最も
惶と多し初後醍醐天皇も徳を脩め政を親と善萬民の心を治む武家條誅
伐の叡慮と苦め權威強暴四海を満たる北條高時入道より滅し東を盛
徳の君より一還幸の後御より驕りと中納言藤房の諫言と容を賸奸詐
第一なる高氏直義を愛めて功を過る恩賞の虎の翼を添ふに似る後患
いと思召れを相模二郎時行を追討の折請を儘して征夷將軍の事をされ初に
叡慮不廻詰りたる約莫あれらの怨に那唐の玄宗に似るを以て所を最惜ら
けるるを情當時の軍功と受ふ初楠正成が絶るける隊兵より千劍破赤阪の
城の籠りより東軍凡八十萬圍むを攻れも捷志を以て忠義の母なる官
軍の眼と屬くこの機を待り勘を介程を義貞圓心東西義旗と揚勤

王の功車かきぞあれ由て論まればその功正成を第一とすべし次は新田義貞と鎌
倉と討夷けてその巢穴を拂ひかちりと第二の功とす又その次の圓心高氏六波
羅と攻滅し名和長年を船の上山小佐々木清高と討走りて皇居を守護し
舊都を還幸するもあはせたるこの功は這那甲ひる第三番と做す死の志を以て
足利高氏にせり北條と通家と官職あり所領も多かりありて世の人を尊敬大
かざる所りければ帝も憑り思食ふ高氏情々地不准后の母は新待賢門院是の
媚る屢内奏を経たりくその功は大きく過るる三位不叙し治部卿はあはれ
死諱の一字を賜りて尊氏と召れは朝恩亦洪大なりその中赤松圓心の軍
功あれも賞せらるるその子律師則祐が大塔宮の仕へし准后の忌せのふより
執成りぬるる也佐用の莊を賜りて播磨の守護を召放され圓心の這恨を
ゆく初尊氏が反逆の折を賊首不隨従り那悪と次貝けり官軍他は斃所を

捕られり。戦ひ難義不及びと。勘々ぞ。これをめま。圓心の初六波羅と攻めり。と。その
 身の采利も做せり。朝廷のあん。與あつた。さう。孟子の教。忠君の臣と見つる
 と。草芥のごとく。あつた。臣も亦君と。さう。雖言敵の如く。ま。この。素是故。あつた。君
 たる人を。箴るの。臣たるの。ゆ。あ。故。孔安國の孝經の序。君の君たる。と。の
 と。臣の。臣たる。あ。あ。あ。圓心中。忠義の心。あ。恩賞の功。當ら。と。の
 時の不祥と。あ。做。臣。道。盡。采利の與。朝廷を恨。虎狼野心の本
 性。見。陡地。反逆。荷。尊氏。股肱と。做。行。狀。丸。彈。を。做。堪。ら
 然。宋の儒者。朱熹の言。人。只。曹操。漢賊。を。知。孫。權。も。亦。漢。賊
 あり。と。知ら。と。の。い。異。あ。我。恐。後。々。南。帝。御。子。孫。の。與。害。を。做。の。の
 必。赤。松。が。當。黒。也。且。叛。逆。の。め。あ。圓。心。ま。か。の。如。又。尊。氏。の。奸。詐。の。初
 高。時。の。催。促。不。從。ひ。名。護。屋。高。家。と。共。侶。伯。耆。を。投。出。陣。の。折。高。時。の。疑

して。折言書と。呈。その子。竹。却。六波羅。不到。東。西。の。勝負。と。揣。軍。馬。を
 篠。村。に。駐。めて。動。も。高。家。陣。歿。あ。つ。と。て。猛。可。官。軍。に。從。ひ。ま。つ。赤。松。圓。心。千
 種。忠。頭。們。と。共。侶。六。波。羅。を。攻。破。り。第。一。の。功。と。思。ふ。介。後。鎌。倉。の。在。り。謀
 及。の。折。義。貞。節。度。使。と。奉。り。て。追。討。の。通。途。官。軍。屢。利。あり。と。つ。て。尊。氏。慌。て
 頭。髪。を。削。り。て。建。長。寺。の。入。り。内。心。真。実。逆。罪。を。怕。れ。不。然。朝。恩。後。り
 介。後。京。中。軍。敗。れ。筑。紫。を。投。て。走。り。折。闘。戦。と。君。と。君。の。見。争。ひ。は
 る。さん。後。伏。見。院。御。在。世。の。日。空。綱。院。宣。と。稟。賜。り。新。院。上。皇。も。亦。共。侶。と
 尊。氏。一。味。ま。せ。尊。氏。遂。光。嚴。帝。の。弟。光。明。帝。と。推。立。て。御。位。不。即。ま。つ
 延。元。の。號。と。用。い。ま。尊。氏。の。奸。計。也。光。嚴。帝。の。高。時。が。あ。り。ま。あ。せ。君
 あ。れ。尊。氏。重。祚。を。稟。薦。め。その。弟。光。明。帝。第。四。子。と。御。位。不。即。ま。つ。せ。り。

廢立の功を以て巳が隨意せんといふの故に後醍醐天皇の叡山は行幸し舊
 都小幽のれ竟不吉野は白皇居とて南北朝と分れるは後醍醐の御代に
 朝の成興の忠義を盡さんと云ふは皇統の左ま右まこれ風雲の會不棄して
 只我家と與えと逆伎倆の氣は南朝後村上天皇の正平六年冬十月尊氏直
 義不和より北京を勢するれば姑且危窮を避人為尊氏義詮父子詭之南朝へ
 降参せし折南朝の君臣もその機を猜しと勅免あり北朝の劍金と南朝へ渡り
 まわして北王宗光帝と退けり。太上白皇の号とまわらせり。その次の年正平七年春二
 月官軍の大將楠正儀北畠顯能千種顯經河桂河より攻入り折足利義詮
 敗走りて美濃州へ逃る折持明院の三院を情をも棄措て御安危と云ふら
 ざの故に光嚴光明宗光の三院の南朝の令なれり。加名生の別宮小幽せしは
 尔後尊氏義詮門詮議し。宗光院の成母弟後光嚴院とあるは平一。

御位小即ちあせけり。これ由り観ると死の尊氏義詮が做志所北朝の由心ある中
 あらざり。只國賊といわれぬ與に立まわらせり。君をれば君臣の名をありまわす。萬機の政
 事の毫たりも御あらし儘せぬ。是より王室卑らま。風俗陵夷及び
 歎くものもあまのあり。在昔保元の内乱の新院崇徳太。と後白河天皇と皇統は
 成争ひの成起り。君の弟兄臣も弟兄。頼長。武臣も亦父子兄弟。為義朝等。鎌
 磨の劍を削り。三綱乱と。國治らば亦復平治の逆。古あり。平清盛武功の
 よろ。獨兵權を執り。推て天子の外戚の做陟。殘忍恃逆せざるの
 なく。官家のあれども无が如し。是時小當。源頼朝義旗。伊豆配所は揚々。
 平家と西海討滅。凱歌と京師奏せ。後白河法皇叡感のあまの摠
 追捕使と授け。是より武家の敏昌。威と八荒の輝。朝家をさう。後々
 へ。武断の憑。頼朝の兒。子們亡びて。北條義時陪臣と。

命を執りて四方を威伏し、美久の乱起るに及び、後鳥羽土御門順徳の二皇子を
 孤嶋に遷し、まわして暴威を子孫に傳へし。余後伏見院のあつて龜山法
 皇御隠謀あり、那北條を滅して美久の御送恨を雪めまはせんと思食ける。余
 淺原入郎為頼父子の内裡に入りて自殺せし。御隠謀の事せし。余
 余當今伏見院に北條貞時が厚く管待なり。後嵯峨天皇の御送詔に
 遵ひしを推して皇位に即けまはせし。徳とて。鎌倉復報の事。中の
 院嶺新院、後宇を六波羅遷し、まわして。と。つえ、龜山法皇駭ひ、
 一切知召さるるを折言の死消息さへ貞時に賜りければ、古又の忽劇に静り、あされり
 又御四世と麻芝後醍醐天皇御即位の初より、へで高時を誅戮して、後鳥羽龜
 山両白鳥の御送恨を雪めまはせんと。年来御隠謀頻り、東宮光嚴、北
 條高時が相謀て立まはせし。徳とて。鎌倉へ告させり。高時竟滅

びて、又尊氏の御心を寄めて、後醍醐帝を苟且る。御父子の義あるを、思
 刀口を是より朝廷南北に立分れて、天の兩大陽あるに似たり。那北條が悖逆するに
 義時、二皇子を孤島に遷し、まわして。余、月越庵の惨酷に至り、又那尊氏
 直義が殘忍なる大塔宮護良親王の宮尊良親王と始なり。南朝は、自王子皇
 孫他們が與に幾位歿命を喪ひ、その事軍記に載るるも、漏るるものあり。余、
 又只南朝竹園の金枝玉葉の、さるる北朝の君も亦閉戦難免、及ぶ毎に尊氏
 義詮、們の棄れられ、或の敵の虜と取り、或の近江の山里に伶仃ひ。萬機の政事を
 夢みず、知召さとも。南朝の死威勢、武家の足利を、お及せぬ。のみども、政の朝廷より
 出るる少かりあり。初より、保元の乱原を思召る。後嵯峨帝の送詔、縁て大
 覚寺殿持明院殿御執着の御私欲なく、高時誅滅の時、當りて御合體す
 ば、非除尊氏猛威を振て、四海を呑んと欲するも、その憑心所あり、と。竟、余自

滅すべし。此は是持明院殿の行心と云ふもの。又後醍醐天皇の御失策ゆゑに
 初北條高時を滅さんと思召させ比日御隠謀の趣にて中原章房を仰合
 さるごありける。那章房の儒学の達人忠信正首を召ければそのあはれとて
 悄悄地を諫せしむると他が口より洩れせんとて。闇敷に敷きしむれば
 福して滔は禍をその臣若罪あはれ法度と明しと誅しあはれ。章房素より罪
 あはれ口中心の心のて諫言せしが影護とて。竊に敷きしむるの絶て至尊に
 祈りあはれ。小後笠笠着の戦ひ破れ。六波羅維幽れぬ。折快々三種の神器
 持明院殿へ渡りしむる。御讓位あはれと。遺言せしむる。太平
 記に載せしむる。折神物神器遷播せしむる。小後又尊氏小賺されて。叡山より還幸し折叡
 慮の中似ぞ幽閉られて。尊氏を拒む由る。豫造置したる三種の神器の贋
 物を持明院殿へ渡りしむる。蓋三種の神器の御祖神の御送宝也。外邦の比

類あると云。然天日嗣知召を継體の君授受す。皇位を萬歳萬々歳に
 傳はせしむる。至神至妙の灵宝と一時の權謀をいふ。その贋物を造出とて逆徒を
 給はぬのければ尊氏も亦私に国位の君と造立と。那紫の朱と奪ふ。南北沖敵の
 禍を致したり。よして是は這君。後醍醐の外剛と内柔なり。初御隠謀の緯の趣鎌倉
 を折御生文を賜ふ。神を託言して高時が怒を寛めぬ。一は那正志。一は龜山帝。一は御先蹤
 ありと云ふ。天子のさるる。然るに孔子のいへる。古の愚は直なり。今は愚は詐
 る。匹夫匹婦も詐ればこれを笑ぬ。天子の伴りあり。民を導く。徒らに信る
 故に孔子のいへる。晋の文公の諷して正しむ。齊の桓公の正しむ。諸君を會盟して周室を尊びしむ。その功有一似されども。葵丘踐土の二會は
 随一善諸侯を會盟して周室を尊びしむ。その功有一似されども。葵丘踐土の二會は
 于てその甲乙を論せらる。詐りの正しむ。その身正かりければ。今世の行はる。その身
 正かりければ。今世の行はる。亦是孔子の教える。這君伴の如く。僻事の初よりして

尋常記に一旦素懐を遂ぐとも始めて終る。幾程もくせし又乱きて昔都(還)
 幸支成らざ刺すく自王子達を賊徒の與に喪れり。憤り杖露と做りて吉野の宮に
 隠れぬ。孫帝後龜山の義満お給れて御誓約の画餅おるし。御祖神の嫌せ
 後醍醐帝の死詐欺の応報を争何せん最痛くたるを。姑麻手姫歎
 息の涙と帝妻時推林示めて然す。具小知りかたり。治乱の顛末宏論鹿主譚の
 うやゆと死那御告文のゆいも當日相摸入道が赤崎藤太郎左衛門利約に讀ませ
 听けり。叡心不偽處任天照臨見と遊されける條と讀る折に利約猛は眩血
 垂けれ。讀果ぎて退出せ。その日よりきて喉下悪瘡出て苦痛堪む病悩七
 日ふして死ぬ。太平記にえは侍り。皇威然もて灼然る。その後立着の没落の
 合はれぬ。又尊氏直義が叛はる。後々も介する。いふ所と
 同(九六)媛微笑てその那事と記せり。皇威を神さきく欲りて。如右文を飾

下(常)樂記に檢考那齋藤利約。正中二年五月七日死去。又高時御
 告文を賜り。正中元年の事か。信れ御告文の事あり。三松と摩く利行の
 死記せり。誤り知るべ。但その時の事。太平記に尊氏の與に文藝が
 就中保曆間記梅松論に記せり。足利氏に倭媚。順逆の理を達し。
 かの現成敗の惑ふ人心盡く書と信。其書る。不如。孟軻のいん。是ふ多ゆ
 る。その姑麻手姫感歎。去てそれ疑ひ解けり。又後醍醐天皇外剛く。内柔
 去と宣い。其の甚る。故と再問。然。那君英武のす。は。智慧の缺る
 所あり。そとも思ひ。當時朝廷の御徴力。一天四海の猛威を振ひ。高時を誅せ
 と思食立。より。置置は患。苦と凌せ。御本意を遂る。中主のよ。を。
 是英武心術の廣大。多ふ。時。勢を知召ね。昔の如く公家一統。大
 御世は做さんと。士庶の歎をえ。大内裡を造營。文武両。

の。嘗てを色ひく頼朝以来華家。肩を尖り肘を張る。武士のわれをみる如く。京家此奴の傲るは似れが太平の世と喜ばれ乱と樂みの言ふ。人程は尊氏及逆の旗を建より采利を以て武弁の毎水の低糸就く。威尊氏に従ひて朝家と物に屑とせむ。佐々木尊氏武畧も長て連帥の徳あるもの。只是時々の和とゆるたるより利運するの故の時々の大志あるの。那義時が頼朝不傲を一呼せし世界に武士の悉皆皆左祖せん。這勢ひと思召れ南朝の。後々も軍旅の事中最疎る。仁柔の宮達と征夷將軍不傲。且文弱なる公卿生上達部と新田楠村上。立てて大將するされか。北畠父子弟兄と護良親王と除てて是をいん武功。ゆゆに要緊の折角狼狽と不足縁實する。古の諸司百官も文官武弁の差別する。事折るの器と擇て征伐を任。今も古轍と踏きし時と勢を知召れ船小刻と劍と求る。又那護良親王の唐は太宗に

元弘の武功大なるを。事件の親王と東宮不傲を。正成を以て大將軍する。且義皇を副將軍と。俱に尊氏を討。官軍の軍威必振ふ。乱と撥る大功あり。諛言と信容を護良親王と罪ある。刺直義を預け。鎌倉下。仇を借する。不酷。這君大智不傲。はさ。敵慮の不足。又建武二年秋七月相模二郎時行が蜂起。大軍とて鎌倉を攻入り。折帝。駭は怯。尊氏を討。大将する。則。乞ふ所の関八州の管領と征夷大將軍たる。立地不勅許あり。御後悔。又延元元年冬十月比叡坂本の戦。難支の折帝。氏不賺され。新田以下。忠義の武臣の苦戦を忘れ。忽地逆臣と和睦あり。京師へ還軍。せし。約草。御失策の時。不祥。胆落。慌。外。帝。性。剛。く。は。内。柔。と。理。違。是。後。村。上。後。



あまひめ

たづ

女本傳第二冊卷一

六八

母年五十三甲辰又



青ねん 十二年 娘
 劍 俠 希 天 朝
 ろくろ山よこの雲をのぞく

九六媛

りせ

有像第三

依家仁義三車

三十三

るれば餘殃するといふべし。方僅義満が世に方々。南北一統あるといふも宜し。一統ある
 ゆへに、その人権詐の癖を、いかに之種の神器を、今復さんと欲する。南帝を
 給はせり。和順不及び、これ以後とも世に又乱れん。その内心を、規へ穿窬、命は
 異なる。口は是衣冠の罪人ある。その身は、鐘の時運を棄て、五十年乱れる世を理
 めたり。けれども、驕恣にして、礼節を疎る。その身は、二十七歳の時相國たると
 請、稟せし。小平清盛の外、その例を、と。輒く、勅許する。一うが義満怒罵りて、あ
 らんせんと。公家の御領を、送る。抑へ、我身も、國王を、倣す。斯波細川
 畠山、門を、根家清花、は、做させ、其折、以、知、り、あ、と、と。頻、り、の、焦、燥、な、ら、け、れ、朝、議
 此、子、避、目、易、く、勅、許、あ、り、と、せ、え、る。驕、慢、か、の、如、く、い、け、れ、親、族、誼、譜、第、母、ま、ま、
 陽、の、麻、斐、徒、へ、も、陰、の、各、々、鬼、胎、を、抱、え、る。野、心、は、の、勘、々、を、鎌、倉、の、管、領
 足利氏満、その子満兼、に至りて、世を謀らんと。思ひ、か、も、短、命、な、り、と、事、成、さ、り、死

され、ま、ま、る、か、ら、あ、ら、う、と、い、ふ、事、は、起、り、危、ろ、う、と、討、滅、せ、し、ま、し、免、れ
 然、ら、山、名、大、内、が、兵、乱、蕭、牆、の、内、に、起、り、危、ろ、う、と、討、滅、せ、し、ま、し、免、れ
 たる、上、の、天、子、を、敬、い、ま、す、と、下、の、子、持、と、不、和、し、て、三、郎、の、義、嗣、を、の、こ、
 後、の、患、い、を、あ、ら、う、と、い、ふ、口、一、家、の、の、り、ま、す、その、世、の、安、危、を、知、ら、れ、る、却、第、一、は、不
 忠、不、義、の、我、大、皇、國、の、例、を、外、邦、の、臣、に、倡、へ、明、の、成、祖、の、冊、封、を、受、く、日、本、國、に、未
 封、せ、し、と、一、期、の、栄、と、思、ひ、大、辟、無、狀、萬、死、の、當、り、と、這、宅、の、不、義、の、罪、を、と、も
 南、帝、を、給、は、せ、り、と、誓、言、の、背、く、一、條、と、明、の、冊、封、を、受、た、は、是、國、體、に、係、る
 処、謙、然、と、し、て、饒、ま、さ、る、と、後、宿、怨、あ、る、と、も、天、の、替、り、と、道、を、め、ひ、し、る、非、道
 ま、ま、の、の、る、小、況、や、君、父、の、讎、言、敵、と、す、年、來、和、女、郎、が、數、ま、す、欲、ま、し、情、願、道
 理、の、稱、ひ、し、り、我、辨、論、を、惜、ぎ、し、順、逆、の、理、を、解、諦、せ、し、劍、俠、は、美、と、示、さ、ん
 與、へ、宿、望、成、就、今、宵、の、先、と、り、邪、念、を、祛、け、徐、に、准、備、を、せ、よ、か、と、言、
 詳、に、論、さ、り、理、論、は、姑、麻、姫、奮、雄、十、倍、勇、心、と、推、鎮、め、理、非、明、辨、る、は

自他の得失仇多しとも他は理ありて我は理ありて賊を仇多しとも義満は
 如きの罪と正まへしと宣まるとを剣侠の要領ふてをゆるめ快北山赴きて二世の
 怨と雪めてん許さざるを只管の備とを要時と推禁めて冤家をも國家に
 大臣數も必し礼あり儀あり戎衣も更めて宜く弓矢前を携ふべしと云ふ面個の
 仙女童も豆と知上端があらぬと奥よりと来る腋甲臙眉細鏑戰裝大刀
 七首草鞋も俱に姑麻姫の卒と薦む六種の戰服姑麻姫へ恭しく受合もり
 退る身装して立寄れば九六媛の準備の弓矢前を左右の合もりあやくと姑麻
 姫も又召進着て這個弓矢前へ我贖を和女郎もあつて中這征箭前
 往る建武二年乙亥の冬十月逆臣足利氏が鎌倉に在りて謀及の折箱根
 竹下れ歎所也官軍を柱んと與服る上栴の尖箭是則他が本心獲鼻は虐
 見と朝廷よりと彎弓たりける吉又の翔の東西るれば和女郎今亦這箭前よりてその

孫義満と射し侍は是返矢の故実の稱へ太古十劍振神の御代の高皇產
 靈尊より天稚彦を賜りて天鹿兒弓天羽々矢あり天稚彦を弓矢をりて元名
 雉と射て斃せしその矢雉の胸を洞達し高皇產靈火尊の御座を面前よりん
 達るける高皇產靈火尊と御覽する鏃の鮮血塗まをりよるてその矢を會
 めひて還し擲ちめひるが過ぎ天稚彦の胸前に貫竅と中々仰反倒れ
 死にけり是より世の人返矢を怕りとの縁故神代紀に見えてる世とは是は
 季子も泊ぶといへども今も足利尊氏が官軍と射し征矢を返しとて孫義
 射し侍るる令も易き天の眞罰あらは優る東西ありや六十餘年此
 昔より新田楠兩家の子孫の縁あはりの授んとて未然を察しと藏
 措たは我々素懐を遂たはるる卒ととりひるが邊與ま弓矢前を姑麻
 姫の受合もりち戴はるる莞尔と笑ふ小脇引引着送は方なり見論し

殊更とさ不ふ這この恩おん既にいはぬからけはら怨うら復り一や矢あ天あのた羽や々や矢よも外るるぬの神かみのま眞ま助すけ
 と師しのし御ご庇ひ中ちゆう宿しゆく意いをを果はきまるる瞬まじくひま間ま程ぢゆうををかかるるままあありりててんんとと心こころでで立たてた九く
 六む媛むすめハハ亦また復また雲うん垂た時ときとと推おし禁しんめめるる京きやうのの北きたるる義ぎ滿まんのの金きん閣かくすするる遥とほくくはは初はつでで
 白しろくく旅たびるる所ところ飛ひのの術じゆつとといいふふもも指さ南なんああるるまま迷まよひひせせんん然しかんん亦また這この香かう煙えんとと
 路ぢゆうのの導どう引ひききまま那な里り不ふ到たうりりとと雙ふた言ごん不ふ遇ぐりり名な告こ被ひ射しやくく仆ふままとと身み不ふ傷やう
 着ちやくせせ五ご臟ざうとと破やぶりりぬぬ劍けん術じゆつのの妙めう其その首くび不ふ在ざいりりそそのの折せ人ひととと知ちききももああれれ速すみ不ふ多た
 還かへははをを佳よととまま這この上じやう旨しめをを忘わすれれるるとと誨おしええ更さら不ふ燒や占せんはは香かうのの煙えんののちち靡ひ
 方かたをを御ご導どうすす不ふ姑こ摩ま姫ひめとと告こ別べつりり欽きんびびをを演えんはは暇いもも夏なつのの日ひのの暮くれ春はる收こ程ぢゆう不ふ
 身みをを跳あららししめめ忽たち地ぢををええままるるああけけりり畢ひつ竟けい這この日ひ姑こ摩ま姫ひめがが金きん閣かく不ふ赴しゆりりてて君きみ
 父ちちのの怨うらをを復またまま不ふ吉きちややととまま次つぎのの卷まき不ふ解げ分ぶんははをを聽き絲いとかか

常三



用卷敬馬奇俠客傳第三集卷之一終

